

「日本 T. S. エリオット協会研究会」のお知らせ

昨年 4 月、日本 T. S. エリオット協会では会員相互の交流と新しいエリオットの読者層の開拓を目的として、「日本 T. S. エリオット協会研究会」を立ち上げました。この度第 3 回を迎える、松本真治会長による『うつろな人々』の話題提供を出発点として、つづく読書会で、今年 100 周年を迎える同作品の魅力をさらに探ってみたいと思います。エリオット協会会員に限らず、本研究会に興味のある方も参加できますので、お知り合いやご指導されている学生をお誘いいただいて、ふるってご参加ください。

日本 T. S. エリオット協会第 3 回研究会プログラム

2025 年 4 月 20 日 (日) 14.00-16.30

オンライン (Zoom)

【話題提供】 14.00-14.45

『うつろな人々』の成立過程

【読書会】 15.00-16.30

『うつろな人々』を読む

松本 真治 (佛教大学)

◆ 『うつろな人々』の成立過程／『うつろな人々』を読む

まったくもって個人的な話となります。『うつろな人々』についてはこれまでに 5 本の論文を書きました。古くは大学院生のころで、今から 30 年以上前のことになります。今から振り返れば黒歴史でしかないのですが、『うつろな人々』発表からちょうど 100 年目の 2025 年にもう一度この詩を読んでみようと思いました。

前半の話題提供では、『うつろな人々』の成立過程に関する情報を提供します。成立過程については、私も日本 T. S. エリオット協会大会（1999 年）のシンポジウムで発表していますが、現在では Christopher Ricks and Jim McCue 編の *The Poems of T. S. Eliot* (Faber and Faber, 2015) で簡単に確認できます。『うつろな人々』はいきなり現行の形で発表されたのではなく、それまでにいくつかの雑誌に発表していた詩を利用し、それらを組み替え、新しい詩をつけ加えて現行の姿となっています。現行版となるまでには、どのようなコンテクストの詩となっていたのかを中心に確認し、タイトルの出所になっているウィリアム・モ里斯やラドヤード・キplingについても触れてみたいと思います。そして、後半の読書会では、最終的に現行版はどのような詩となっているのかを、ご参加のみなさんと一緒に確認していきたいと思います。

◆ 登壇者略歴

松本真治（まつもと・しんじ）

佛教大学文学部英米学科教授。同大学文学部長、副学長を歴任し、現在総合研究所長。T. S. エリオット以外に興味関心があるのは、ミュリエル・スパークやエリザベス・ボウエン、文学教育。主な研究業績としては、共編著に『四月はいちばん残酷な月——T. S. エリオット『荒地』発表 100 周年記念論集』（水声社、2022 年）、共著に『エリザベス・ボウエンの短篇を読む』（国書刊行会、2024 年）、『エリザベス・ボウエン——二十世紀の深部をとらえる文学』（彩流社、2020 年）、『比喩——英米文学の視点から』（英宝社、2019 年）、『多維視野下的中日文学研究』（中国社会科学院文学研究所編、社会科学文献出版社、2018 年）などがある。